附属中学校　教官伝

英語科編５

第１０５号

平成２１年１０月２０日

５　樋口　一葉をめぐって

平田　喜一（禿木）東京出身東高師明３１卒　在職３１～３６　東高師教授

現在の五千円札の肖像が、明治の女流文学者・樋口一葉であることは誰でも知っていることですが、この一葉を世に送り出すのに大きな力があった人物が、平田喜一（後年は禿木と称することが多かったので、一般的には、「平田禿木」という名前で知られています）であったことについては、文学研究者間では知られていても、一般的には、あまり知られていないことだと思います。

そのころ、平田は一高の学生でしたが、文学に対して大いなる興味があり、平田が編集主任で、島崎藤村・北村透谷らと一緒に『文学界』（明治文学の出発とも称される雑誌）を発行していました。そこに、一葉から「雪の日」という稿が送られてきて、これを、平田が見て、今までにない偉才だとして、『文学界』に載せ、後に、『たけくらべ』などの発表で、一葉は著名な作家となったのです。樋口一葉と平田との出会いは、古くは、平田禿木著『禿木随筆』（改造社　昭和１４）、最近では森まゆみ著『一葉の四季』（岩波新書・２００１）に詳しく書かれています。

ところで、平田がなぜ附属中学の英語教官になったかについては、彼の数学嫌いにありました。すでに、若冠２０歳にして『文学界』を創刊し、すでに文壇の新人として華やかな存在であった平田の生活は、島崎藤村の小説『春』に描かれていますが、「市川（平田のこと・山口）は福富（同級生であった上田敏・山口）と一緒に東大へ進むべき人ではあるが、一時目科を放ちゃくした位で、高等学校を卒えずに退いた」とあるように、数学が苦手で落第したためでした。そして、数学をやらなくてもよい、新しくできた東京高等師範の英語専修科の第一回生として入学したことにあります（伊村論文）。（ただし、鏡味國彦著『英学の先駆者―平田禿木』（文化書房２００３）では、平田が一高を退学した理由は、病気になったためだと書かれています。）

平田は、東高師を卒業すると、すぐに附属中学の教官に採用されました。平田の授業の様子は、長田幹彦（小説家・戦前の著名な流行歌作詞家　１３回）の随筆『文豪の素顔』（要書房　昭和２８）に詳しくあります。（引用はママ）

「今学期から英語の受けもちが平田先生といふのに変わってゐた。下町風の角刈にして、灰がかった背広を粋に着こなして、オリブ色の蝶ネクタイなんかしたきゃしゃな人だった。とってもひどい近視で三側めぐらゐからうしろの生徒の顔はよくめえないらしかった。ぼくらはさかんにカンニングをやったり、机のひきだしからドロップを出してしゃぶりあったり、腕白の限りをつくした。分自党の鳩山一郎さんが二つうへのクラスにゐた。野球のティームでは彼がファーストでぼくがセンターだった。彼は白皙の美少年で秀才だった。（鳩山一郎は野球が好きで、『スポーツを語る』という著書があるくらいです・山口）」「平田先生はビー玉をうしろからぶっつけたりすると、煙草で真黒に染った歯をだしてにいっと笑ふだけである。ぼくはすっかり先生をナメちゃって「銀チョ」といふ渾名を奉った。トンボの「銀チョ」は羽根をつまむと、真黒な口を一ぱいあけてかみつこうとする。その口のかっこうが平田先生にそっくりであった。その平田先生は、リーダーの講義をするときに、マッディ・デイッチを「お歯黒どぶ」と訳したり、フォッギィ・ナイトを「おぼろ夜」と訳したりした。マザーは「おッ母ア」である。とても文学的な適訳をやった。」

この後、長田と平田との授業でのやりとりなどがまだまだ続きますが、当時、桐陰会雑誌に「逢瀬が淵」という小説めいたものを投稿していた長田にとっては、いたずらもしましたが、島崎藤村について、次のように語った平田は好ましい先生と写ったようです。それは、長田が「若菜集」などについて語ると、

「ほゝう、あの島崎藤村の新体詞がすきなのかい。あれはクリスチャンになって、三月でよしちゃったをかしな男だよ。田舎っぺの、ギスギスした書生ッぽだよ。あたしはよく知っている。」ぼくはそれをきいてびっくり仰天してしまった。平田先生の頭から後光がさすかと思った。」と書き、敬慕の念を新たにした、とも記しています。平田は、長田にとって、英語の先生であっただけでなく、文学の先生であったかも知れません。

平田は、附属中学の教官を５年間勤めていましたが、明治３６年、嘉納校長の勧めもあり、文部省留学生としてイギリスのオックスフォード大学に行きました。このころの平田について、「吉田本」は次のように記しています。

「平田喜一君　近くに帰朝されるはず。その昔「文学界」時代の禿木氏であらうとは多くの人の気付かぬことであろう。君はただの英語の教師ではないのである。」

そして、帰朝後は、一年間東高師に勤め、その後、学習院や法政大学出講のほかは、もっぱらヴィクトリア朝を中心とした英文学の紹介と執筆に専念します。樋口一葉とは、彼女が生前、一時期疎遠となりましたが、彼女の死後は一葉の顕彰に努めました。

平田禿木については、たくさんの著作や評伝があります。平田禿木著『英文学印象記』ＡＲＳ大正１３　同著『ＳＷＩＦＴ』研究社英米文評伝叢書昭和１２　同著『英国民』研究社昭和１６同著『平田禿木選集全三巻』南窓社昭和６０

６　札幌から高知へ？

野田幾三郎　愛知県出身東高師明３１卒　在職３２～３３

野田については、詳細がわかりません。附属中を辞めて、札幌に行き、その後、明治３８年には、高知一中に赴任したこと、大正２年から４年まで、新潟県の新発田高校の校長を勤めたことのみがわかっています。その野田は同級であった平田禿木に対する思い出として、平田は成績が抜群で、ギリシア語、ラテン語の知識もあったこと、教科書はいつも学校の机において帰り、一度も下読みをしないのに、あてられると美しい発音で読んだ、と語っています。昭和２年・昭和３２年の「名簿」では、生存していますが、職業欄は空白です。